医甲様式２

論文審査の要旨(甲)

申請者領域・分野　氏名	病態制御科学領域　消化器内科学教育研究分野　明本　由衣
指導教授氏名	福田　眞作
試験担当者	主　査　佐々木　賀広 副　査　若林　孝一　　副　査　澤村　大輔

(論文題目)
Gastric Focal Neutrophil Infiltration and Wide Duodenal Gastric Foveolar Metaplasia Are Histologic Discriminative Markers for Crohn's Disease and Behçet's Disease
(胃の限局性好中球浸潤と十二指腸における広域な胃上皮化生はクローン病とベーチェット病の組織学的鑑別マーカーとなる)

(論文審査の要旨)

クローン病(Crohn's disease; CD)における上部消化管病変は衆知であるが、ベーチェット病(Behçet's disease ; BD)の上部消化管病変に関する検討は行われていない。申請者は、臨床診断が確定したCD患者50名、BD患者34名における胃・十二指腸病変の違い（内視鏡所見・生検組織所見）を対比的に明らかにした。

内視鏡所見：

胃では竹の節所見(17/50 CD, 0/34 BD)とびらん(14/50 CD, 2/34 BD)が有意にCDで多く観察された。十二指腸ではびらん(14/50 CD, 1/34 BD)が有意にCDで多く観察された。

生検組織所見：

胃ではFocally enhanced gastritis (CD9/86, BD 0/64)と好中球浸潤(CD 17/86、BD 1/64)がCDで有意に多く観察された。十二指腸では絨毛萎縮(CD 55/93, BD 27/71)、陰窩炎(CD 11/93, BD 1/71)、胃腺窩上皮化生(CD 28/93, BD 8/71)と好中球浸潤(CD 29/93, BD 6/71)がCDで有意に多く観察された。組織所見の中で、特にCDを特徴付ける所見は、十二指腸において550μm以上の胃腺窩上皮化生を有し、かつ好中球浸潤がみられることであった（感度/特異度：57.1%/87.5%）。

また、結果に影響を及ぼす交絡因子（薬剤と疾患活動度）は病理所見と関連がなかった。

当該論文は、CDとBDにおける胃・十二指腸病変の違い（内視鏡所見・生検組織所見）を初めて明らかにしたもので、既成のCDとBDの診断基準を補完するものであるあることから、学位授与に値する。

公表雑誌等名	Digestion DOI:10.1159/000494922